第18回 ホームカミングデー

秀麗な富士山が卒業生を"お出迎え"
約3700人が懐旧談に花咲かせる

葛西聖司氏（左）と黒部透氏（右）によるトークショー

"卒業生のお祭り"―。ホームカミングデーが10月28日、多摩キャンパスで開催された。迎えて第18回のことしは、前日の豪雨が嘘だったかのように、雪化粧した富士山が秀麗な姿をみせる秋晴れとなり、約3700人が参加した。

午前10時15分から、クレセントホールで行われた開会式では、校歌斉唱に続き、鈴木敏文理事長、永井和之総長・学長、久野修慈学員会会長が挨拶。NHKエグゼクティブアナウンサーの葛西聖司氏（昭和49年法学部卒）の司会・進行で3組の親子三代卒業者の表彰が行われた。

有名レストランの模擬店に行列

青空の下、ペデ上では、学員会支部や有名レストランにより模擬店が出店され、OB・OGによる法律、年金、不動産などの無料相談コーナーが設けられた。メインステージでは、府中市の郷土芸能「武蔵国府太鼓翔駒会」による力強い和太鼓演奏や応援部の演技が披露され、葛西アナウンサーと初代ウルトラマン・ハヤタ隊員役の黒部進氏（経済学部卒）によるトークショーが会場の笑いを誘った。

模擬店に行列

1号館では、柳家小団治師匠（昭和42年経済学部卒）による寄席。図書館1階ホールでは、「駿河台の記憶」と題し、インタラクティブアーティストの松尾高弘氏による駿河台キャンパスの当時の様子を再現した

親子三代卒業者授賞式

インタラクティブアートなど様々なイベントが行われた。

懐かしい学友と再会

学生時代にタイムスリップ

ペデ上を歩いていると「乾杯！」という声がいたる所から聞こえてきた。卒業生がビール片手に陽気に談笑している。白髪や頭髪が薄くなった学員が目につく。その多くは駿河台時代の卒業生だ。卒業年次ごとにテーブルを囲み、久しぶりの再会を喜びながら、学生時代にタイムスリップして、懐旧談に花を咲かせていた。

校歌斉唱

食べて、飲んで、同期生が団らん

そこで卒業生の声を拾ってみた。

「ホームカミングデーに来るのは今年が初めてなんです」と、笑顔で話をしてくれたのは長谷川たかこさん（平成8年法学部卒）。

他方、ホームカミングデーに毎年参加しているという山井俊昭さん（昭和50年法学部卒）は、その理由について「それぞれ違う仕事をしている人達が、どうしているかを確認する為に毎年来ている。あとは憂さ晴らしかな」と気さくに答えてくれた。

抽選会に人の波

明大や日大の授業も受けた 駿河台時代

駿河台時代の卒業生という深井祐子さん（昭和53年法学部卒）に、多摩キャンパスと駿河台キャンパスとの違いについて尋ねてみると、「昔は学生運動で授業がなくなったけれど、みんなよく勉強していた。明大とか日大の授業を受けに行ったりもしていたのよ」と当時を懐かしく振り返ってくれた。

「学生運動のために4年間に試験がなくなってレポート提出になったのが2回もあったよ」と話してくれたのは森本明生さん（昭和53年商学部卒）。

現在の多摩キャンパスについてどう思うか聞いてみると、野田明利さん（昭和53年法学部卒）は、「駿河台は狭くて汚かったけど良かった。多摩キャンパスは嫌いだね」と少しショックな答えが返ってきた。思い出の詰まった駿河台に愛着を感じているからだろう。

柳家小団治師匠の落語

一方、駿河台キャンパスと多摩キャンパスのどちらも経験したという阿世賀陽一さん（昭和55年文学部卒）は、「昔は汚いとしか思っていなかったサークル棟が、毎年来るたびに新鮮な感動を覚える」とかつてのサークル活動を懐かしむように語ってくれた。

卒業生がつなぐ中央大学の伝統

最後に行われた豪華商品が当たる福引抽選会は大変なにぎわいになり、抽選の度にどよめきが湧いた。

メインステージで行われた応援団の演技に、一緒になって身体を動かす卒業生。子供さんやお孫さんを連れて家族総出で楽しんでいた卒業生。84歳にして多摩キャンパスを初めて訪れたという卒業生もいた。様々な人生を背負った学員が、年に1度、母校に集うホームカミングデーは、こうして幕を閉じた。

駿河台キャンパスで培われた中央大学の伝統は、確実に多摩キャンパスに受け継がれているに違いない。

（学生記者　上田雄太＝文学部2年）

応援団が演技